



ば ば のりあき
馬場 憲明氏
福島民報社
広告局企画推進部

馬場 ●弊社は海沿いの浜通りという地域に、北から相馬支社、南相馬支社、浪江支局、富岡支局、いわき支社、小名浜支局、勿来支局の7支社局があり、これら支社員員の安否確認を急ぎました。結果的には全員の無事を確認できましたが、小名浜支局長は港での取材中に津波に襲われ、大変危険な目に遭ったそうです。あつという間に自分のおへそあたりまで水が来たので、危険を感じてビルの屋上へ上がった。すると自分が乗ってきた取材車が津波に吞まれて、目の下をぶかぶか流れていった。勿来支局は完全に水没。浪江、富岡の両支局は福島第一原発から数キロの範囲なので警戒区域内となり、未だ立ち入れずそのまま放置してあります。我々報道する側も今回は命の危

険を感じながらの取材になりました。
越後屋 ●我々には想像を絶する経験の中で、どのように真実を伝えていこうとされたのでしょうか。
馬場 ●まさにその点で苦悩する日々でした。東京電力福島第一原発事故の影響で現場に近寄れず、大半は伝聞を伝えなければならぬというジレンマがあった。福島県や東京電力、つまり第三者を経て記者クラブのような大きいところで発表されたことを書く形でした。自ら現地へ行って写真を撮ったり話を聞いたたりすることができない取材を、ずっと今も続けている。これは異常な事態ですが、現在もそういう状況です。
メンセンディーク ●私は仙台育ちです。その上、私の兄が仙台で日本キリスト教団学生センターの主事をしています。3月11日、私は京都で仕事をしており、京都は特に揺れなかったためあまり気にしていませんでした。ところが友人から電話が入り、テレビをつけたら本当に大変なことになっていた。離れているけれど当事者のような気持ちで非常に心配しました。兄の家や仕事場は津波の被災地か

らは随分遠かったのですが大丈夫かとは思いましたが、確認するまでかなり時間がかかり、いても立つてもいられない感じでした。
3月13日に兄の職場の日本キリスト教団東北教区センター「エマオ」は被災者支援センターを立ち上げました。神戸の長田センターから牧師さんたちがすぐ仙台へ向かい、支援センターの立ち上げに非常に尽力されたそうです。私も何かしなくてはと思い、仙台の兄から来る情報をアメリカの教会へ送ったり、外国人向けの情報を日本語から英語に翻訳したりしていました。間接的ですが兄のサポートと、情報を英語で発信するお手伝いを始めたわけですね。
越後屋 ●京都にいながら、あの日を境に生活が一変したのですね。
メンセンディーク ●その通りです。起きている時間はずっとパソコンの前に座り、インターネットで情報収集をして各方面に発信していました。新学期が始まって、一人の教員として、被災地の現状や原発事故の事を話題にする形でゼミで取り上げたり、既に仙台のエマオを通じて

3.11東日本大震災から1年を振り返って ～これまでの取り組みと今後の課題

2011年3月11日に発生した未曾有の大震災から1年が経過しました。

現地へ赴きボランティア活動に取り組んだり、マスコミの仕事に携わっている本学関係者の方々が実際の被災地の様子やメディアの働き、諸々の気づいた事などを語り合い、今後の課題や大学の果たす役割について共に模索しました。

出席者

馬場 憲明氏 (福島民報社広告局企画推進部)

Martha MENSENDIEK (大学社会学部准教授)

影山 貴彦 (女子社会学芸学部教授)

鎌田 伸一 (中学校・高等学校事務長)

司 会

越後屋 朗 (大学神学部教授)

それぞれの「3・11」

越後屋 ●本日はそれぞれのご経験や取り組みをお話しいただき、そこから我々が被災地に対しての長い形で関わっていただけることを模索していきたいと思います。最初に同志社大学OBであり、被災地で福島民報社の記者として活動してこられた馬場さんからお願ひします。馬場さんは今日、京都にいられたのですか。
馬場 ●はい。学生時代は列車で6時間半かかりましたが、今日は4時間15分です。着きました。便利になったと同時に、時の流れを感じます。

越後屋 ●ということは、被災地は関西から近いということですね。
馬場 ●そうですね。いま「記者」とご紹介いただきましたが、それは一昨年までで、現在は広告局にいます。ただ、今回の大震災では社を挙げてすべてを現地に投入しましたので、私もかなり現場を目の当たりにしました。

越後屋 ●昨年3月11日のことをお話しいただけますか。



マーサ メンセンディーク
Martha MENSENDIEK
大学社会学部准教授

被災地へ赴いていた神学部の子に続き、社会福祉学科の学生を送り出すお手伝いもしました。夏休みにはかなり多くの社会福祉学科の学生が現地へ行き、エマオで寝泊まりしながらボランティアを行いました。学生たちは夜行バスで行きました。学科では1名につき3万円の補助を出しました。

越後屋 ●ご自身はいつ現地へ行かれたのですか。

メンセンディーク ●ゴールデンウィークです。12月にもエマオを通じてボランティアに行きました。被害の大きかった仙台の荒浜地区は私が子どもの頃よく遊んだ海岸だったんです。今回そこから仙台の中心部を見ると、途中にたくさんあったビルが消失していて、はつきりと向こ

うの街が見えた。あの光景には涙しました。父が見せてくれた戦後の焼け野原の仙台の写真と、よく似た風景だなど。

12月、石巻に2度目に行った時は、きれいになった場所もありましたが、まだまだ手つかずの場所もあって、またショックを受けました。福祉の観点から見ても、被災者の孤独、自殺などがあり、心のケアの必要性を感じました。関西からまずつと関わり続けることが必要だと。エマオではできるだけ被災者との関係性を築きながら活動していますが、そういう長期にわたる支援を私も続けたいと思います。学生たちも関心を持っていて、春休みにまた現地へ行く学生もいます。

福島原発もまた深刻な課題です。私はずっと京都のYWCAで活動しており、チェルノブイリの事故以来、毎年事故の発生した4月26日に原発を考える集会を開いています。参加者は毎年10人くらいですが、去年の集会には300人が来しました。原発の危険性を語っていた人たちは長年無視されてきましたが、今回どうとう事故が起きてしまった。私自身は脱原発派ですが、今後もYWCAを通して



かまだ しんいち
鎌田 伸一
中学校・高等学校
事務長

仙沼、陸前高田、大船渡、釜石、大槌を回り、被災地の福祉施設に寄付金を届けたり、糸鋸の機械を持参して、その場で木のおもちゃを創ってプレゼントしたりしました。

越後屋 ●長くボランティアをしてこれた鎌田さんにとっては、今回も被災地へ行ってボランティアをするのは自然なことだったのですね。

鎌田 ●私が所属するおもちゃ作家の組織『組み木創作の会』は全国に会員がおり、岩手、福島、青森にも7名のメンバーがいます。その中のお一人のお義兄さんと甥御さんが気仙沼で命を落とされました。甥御さんがなかなか見つからず、毎週末遺体安置所に通い、ようやく1ヶ月ほどしてご遺体が見つかったと聞きました。

声をあげていきたいと思っています。

影山 ●お二人のお話とは若干違いますが、私は大阪に本社のある毎日放送で16年間、テレビとラジオの番組を制作してきました。その経験をもとに同志社女子大学の教員になり、情報メディア学科で教えて10年になります。毎日放送では主にエンターテインメント番組を作っていました。1995年の阪神淡路大震災があった当時は若者向けの深夜ラジオ番組「MBSヤングタウン」のチーフディレクター。阪神大震災の日には生放送を終えて軽くスタッフたちと一杯やり、明け方の5時頃に帰宅。地震が起きたのは5時46分でした。案の定、会社からはディレクター業務のできる人間に総動員がかかった。そこから震災報道が始まり、ラジオの特別番組に日々、汗を流していました。

ですからこの1年間の東日本の震災報道を見て、感じることは多々ありますし、今日は馬場さんのお気持ちと共有できる部分もきっとあるうかと思えます。また、メディアにできること、できなかったこと、メディアごとの特色、メディア人から教育者に転じた私にできること

そのような話を聞き、何か自分にできることをしたいとずっと考えており、12月によくやく義援金を持って現地を訪問する事ができました。

越後屋 ●同志社中高として、学校単位での支援はどのようなことをされましたか。
鎌田 ●中高それぞれの生徒会が直ぐに募金活動をしました。中学校の理科の先生は5月の連休中に陸前高田へ瓦礫撤去のボランティアに行き、礼拝の時にその体験談を生徒に伝えたりしました。また中高同窓会からは、建築家の安藤忠雄さんが実行委員長を務める東日本大震災遺児育英資金「桃・柿育英会」奨学金に、一千万円を寄付されました。同志社女子中高や香里中高、国際中高でも、百万円を超える義援金の送金や支援物資送付を行うなど、法人内の中高でも様々な組織的支援をしてきました。

現地で実感したこと 報道内容とのギャップ

越後屋 ●ありがとうございます。3・11は、日本の歴史において非常に大きな分

岐点になると思います。この日の前と後とは、あまりにも多くのことが変わって過ぎてしまった。私自身は被害の大きかった所へは一度も行っていない。ただ親戚が岩手にいますので盛岡の近くなどを少し回りましたが、やはり情報源は新聞やテレビなどでした。特に小誌を読まれる方は関西中心になると思いますので、多くの場合はメディアを通して被災地を知ることになる。今後も同様の状況が続くと思いますので、今日はメディア報道を切り口にこの1年間を振り返り、メディアから情報を得る際どんな考え方や注意が必要であるかについても話したいだけだと思います。

メンセンディーク ●私が一番感じるのは、原発事故の報道内容と、現地にいる人々の現状や思いとの間にあるギャップの大きさです。兄のいる支援センターでは、ある牧師が早い時期から毎日福島へ行つて放射線量を計測しています。その実態と大手の新聞に出る数値とのギャップは、私がエマオを訪問した時にも随分話題になりました。思っている以上に危険であることは、向こうでは早くから話題にな

っていた。福島は特にそうだし、宮城でも早期から放射線汚染への危機感が大きかった。マスコミがそれを取り上げるようになった時は、かなりの遅れがあったと思います。

もう一つは、私の知人であるフリーライター、守田敏也さんの働きについて。彼は3・11から自身のブログで400件も情報を発信しています。現地に行つて子どもを持つお母さんたちと話したり、除染作業も行ったりして非常に活発に動いている。私が京都にいる間の情報源はマスメディアではなく、守田さんでした。そして、全国紙ではなく福島民報を読まないといけないことがあると教えられた。原発事故に関する情報は特にそうだと、私も分かりました。

越後屋 ●鎌田さんは12月に初めて現地へ行かれた。京都で感じておられたこととギャップは何かありましたか。

鎌田 ●それは本当に感じましたね。私もテレビやインターネットで情報を見ており、非常に悲惨な状況であることは理解していたつもりでしたが、初めて気仙沼など海岸沿いの状況を見た時はもう茫然

自失というか、想像をはるかに超えた状況が目の前に広がっており、戦場跡地に立っているような印象でした。こんなにも凄かったんだと、からだ全体で感じました。

9ヶ月が経過した頃でさえ、10メートルもの高さに積み上げられた瓦礫の山がいたところに放置されており、ちょうど陸前高田を訪問した時には、前日の夜から瓦礫が自然発火して燃え続け、10台以上もの消防車が来て消火作業を続けていました。匂いがあたり一帯に立ちこめていましたが、この「匂い」は、報道では絶対に伝わりません。

メンセンディーク ●そうですね。**鎌田** ●「百聞は一見にしかず」と言いますが、報道番組やマスメディアを通じて何度も見てその悲惨な状況を知っているつもりでしたが、現地に立った瞬間、自分は何も解っていないと感じました。からだ全体で得る感覚は全然違う。大きな開きがあると感じました。

越後屋 ●そういうものは画像や映像の限界でしょうか。

鎌田 ●それをメディアがどう伝えていく

かですが、やはり難しいと思います。どんな形であれ、現地に行く事が大切だと思います。

越後屋 ●馬場さんは実際に被災地におられるから情報収集の難しさもあつたでしょうし、福島民報を読む方の多くが被災者ですから単に被災状況を伝えるだけでなく、被災者にとって有益な情報提供もしないといけない。そういった意味で、被災地において報道に関わることの難しさについてはいかがですか。

馬場 ●先ほども少し触れましたが、福島県の場合、他の2県、宮城・岩手と大きく違ったのは放射線の問題でした。現在も復興のスピードは、3県で同じではありません。岩手・宮城は津波からの復興のスピードが速く、もう前を向いていらつしやる方が比較的多いと思います。しかし福島県の場合は発生当初から放射線という大きなもう一つの問題を抱えていますので、なかなか前へ進めない。当然、報道のあり方も違うと思います。

越後屋 ●今日は震災発生当時の福島民報のコピーをお持ちいただいたんですね。少しご説明いただけますか。

馬場 ●これは昨年3月12日の夕方に出せた号外の一面です。まだ県内の被害状況がまったく分からず、死者97人、全国の死者が217人とあります。翌13日になると、12日に福島第一原発が爆発し、放射性物質が拡散したと。これはどこの新聞社もそうしたと思いますが、中心は原発の話題になっています。14日になると、県民の12万人が避難。政府の発表以前からメルトダウンの危険性に触れていました。

越後屋 ●そのような中で、被災地の方々にはどのように向き合われたのですか。

馬場 ●私たちは報道もしましたが、同時に避難所の人たちに新聞を届けました。当時は停電していて、テレビも見られない、インターネットもできない。ラジオと新聞が皆さんにとって唯一の情報源でした。私たちが新聞を配りにいくと、おじいさん、おばあさんたちが手を合わせ、涙を流して受け取ってくれました。それだけ新聞が大事にされている。本当に生まれて初めて情報の大切さを感じた瞬間でした。

一方でその時に、弊社としては14日あ

1年が経過して 福島は変わったのか

越後屋 ●状況は時々刻々と変化していったのです。

馬場 ●我々の報道内容も日を追うことに切迫してきます。これは16日の新聞。「高濃度の放射能漏れ」「放射線量きわめて危険」とあります。じゃあ政府が「大丈

夫です、落ち着いて避難してください」と言ったのは何だったのか。私はここで政府批判をするわけではありませんが、報道に携わる人間としては、政府の「安心だ」という言葉を鵜呑みにして報道するしかなかった。真実を伝えられなかったのが悔しくてなりません。

結局、福島県は1年経っても何ら変わっていない。昨年12月22日現在、県民の避難者総数は約15万7000人です。県外避難者はそのうち約6万人。避難先は山形県が一番多くて1万2945人、東京都7421人、新潟県6692人。関西では大阪府903人、京都府771人、兵庫県552人です。

越後屋 ●1年経っても基本的が変わっていないというのは、ちょっとびっくりしました。報道では、どこそこの施設やお店が再開したなどと聞きますが…。

馬場 ●これも責めるわけではありませんが、西日本のある通信社の方が「1年経つと、震災関連でもショッキングな話題でなければ全国ニュースにならない」とおっしゃった。それが私は非常に心に引っかかっています。マスメディアは今も、

福島県ではマスクをしないと生活できないとか、毎日放射線に脅えて生活しているんだということを殊更に取り上げて特番を組んでいる。でも県内に留まって生活している人もいて、その人たちは報道によって風評被害にさらされ、福島県にすることが罪悪でもあるかのように感じてしまっています。

1年経った現在、我々の報道姿勢も今には特に、報道とは何か、マスコミとは、新聞とは何かを毎日考えているような状況です。県外に逃げた方がいいとか、県内に留まっている方がいいとかいう論調の報道ではなく、その両方の考え方を尊重しつつも、真実は本当に危険な状態なのかどうかを追いつめていかねばならないのが我々の仕事。正確な情報を毎日出さないといけない状況です。

越後屋 ●現在、福島の放射線量はどのくらいなのでしょう。

馬場 ●今は0・7マイクロシーベルトくらい。福島市の人が1年間に受ける放射線量は1年間で約8ミリシーベルト。国の基準だと20ミリシーベルト以下を目安にしていますので、福島に住み続けるこ

とは、健康上は問題ないという根拠がそこにあります。

しかし、心配のあまり避難する若い母親もいます。父親が「逆単身赴任」みたいな形で福島に残り、親子が離ればなれになる。そのことの方が深刻です。子どもは外で遊んではいけなから、福島県の子どもの体力低下という問題もまた起きています。1年経った今、私たち報道に携わる人間は、それらの事実とどう向き合えばいいのか。メンセンディーク先生が先ほど福島民報は詳しく書いていますと褒めてくださいましたが、それでも我々の書けないことが、真実として闇の中にある。それがあまりにも多すぎるのです。

報道に必要なのは 同じ人間としての想像力

影山 ●1年経っても何ら変わっていないということが、まさに今日私がお話したいキーワードでした。本日の座談会のために用意したキーワードが3つあります。「空回りの励まし」「想像力の欠如」「風化」です。



かげやま たかひこ
影山 貴彦
女子大学学芸学部教授

これは東京メディアとの比較になりますが、私の経験からお話しします。阪神淡路大震災から約2か月経ってオウムの地下鉄サリン事件がありました。その前から、つまり震災発生から1か月も経たないうちに、東京のメディアは「東京で大震災が起きたらどうするのか」という座談会や特集をさんざん組み始めた。我々関西メディアは怒りを通り越して、もう悲しさしかなかった。きつと福島、東北の方々も、今なお同じ思いをされていることでしょう。

今回は東北中心の震災で、東京ともわりと距離が近かったですね。新聞とテレビとは若干違いますが、テレビメディアでは比較的早々に「東北の皆さん元気になってください、そのために私たちは

この曲を東北の皆さんにプレゼントします」という動きを始めた。でも、プレゼントなんてしてほしくないんですよ。私も「阪神」を経験した人間だから、そこは分かる。けれど、元氣になってくださいと言ふことによって、メディアとしては次のステージへ行きたいわけです。そのキャスティング・ボードを握っているのは東京のキー局です。しかし、被災地の状況はそのステージまで行っていない。1年経っても何も変わっていないことを馬場さんの口からお聞きして、私の考えは間違っていないと思いました。

阪神淡路大震災の時、我々は来る日も来る日も番組の中で、水道や電気の復旧情報などを送り続けました。馬場さんが新聞を届けておられたように、メディア人としてよりも、これが人間としてやるべきことなんだという思いでした。

ある時、ファックスが神戸の被災地の方から届いた。毎日放送さん、そろそろ明るい曲でもかけてよというリクエストでした。震災から2週間くらい経って、初めてそれが来た。そこから我々の番組もエンターテインメントに推移してい

ました。これをメディアの傲慢で決めているいけないんです。

越後屋 ●メディア発ではなく被災者発だったからこそ、次のステージへ行けたということですね。

影山 ●東京のキー局が「上を向いて歩こう」を流しても、今はそんな場合じゃない。あれは名曲ですが、本当に落ち込んでいる時は歌など聴く気にはなれない。しかし、そのステージがじわつと変わっていく瞬間があるんです。それを見極めることは人間として、絶対にしてほしい。

越後屋 ●そこに想像力が必要であると。
影山 ●そうです。送り手に想像力の欠如がある以上、励ましは受け手には伝わらない。この冊子が発行される時「3・11」は過ぎていますが、その時のメディアの報道ぶりが今から私には見えます。きつと「忘れてはいけない」「3・11」などというタイトルが付くのでしょうか。

その後にこの冊子が発行される。その時は「忘却」ですよ。忘却の原因には受け手の想像力の欠如があるかもしれないが、もしかするとメディアにも原因があるのかもしれないという気がします。

阪神淡路大震災の教訓を得て、関西のメディアも「東北の皆さんにもできることがある」と言いますが、これもよくよく考えると傲慢ではないでしょうか。これは特に関西の方へのメッセージですが、「阪神淡路大震災を我々は乗り越えた、だから東北の皆さんも乗り越えてください」というのは、いわゆる「上から目線」です。まだ進行中の人に向けてそういうことを言うんですから。

目に見えるボランティアや募金も、もちろん大事です。その上で関西のメディアも受け手側も、阪神大震災を経験したエリアにしながら、東北の皆さんが今どういう状況にいるのかという想像力をどれだけ発揮できているのかを、ぜひ個々の胸に問いかけてほしい。それは強いメッセージとして申し上げたいです。

越後屋●そこに被災地と、東京・関西の報道との温度差があるのですね。

影山●福島民報さんの発行される新聞のテイストと、東京や関西が出す新聞のテイストとはまったく違うんですね。現地で発行され現在進行形として捉えている新聞とは違って、首都圏で出す新聞には

どこかよそ事のような部分がある。それは「阪神」を経験した人間だから感じるということばかりではありません。忘れてはいけないのは、当事者意識です。**馬場**●先生方の励ましは、福島県民にはとても心強く響いていると思います。同志社大学理工学部 학생さんたちも、子どもたちのために福島市の避難所へおもちゃを届けてくれました。すると子どもたちが凄く生き生きした顔になった。おもちやなんて半年くらい手にしていないかったのでしょう。大変喜んで、我先にと受け取っていました。

越後屋●おもちやが子どもたちにとって、大きな力になったのですね。

報道が風評被害を煽るジレンマ

馬場●本場にありがたいことです。一方で、おっしゃるように報道が想像力を欠いている部分はあると思います。ただ、報道しなくなることも大事なことなのかもしれないと思うんですね。「風化しない方がいい」と皆さんはおっしゃいます

ることも、場合によってはあるかもしれませんが。でも傷んだ心、傷んだ土地を思う想像力を内なるところに常に持つておくことが、メディアにしてもボランティアにしても、活動を維持することにつながるのではないのでしょうか。

氾濫する情報をどう整理するのか

越後屋●今回の震災報道では、いろんなメディアが、いろんな形で役割を果たしましたね。先ほどのブログもそうだし、新聞社もツイッターで情報を流すなどしました。そこで阪神淡路大震災の時とは違う、新たな問題が出てきた。例えばツイッターでは多種多様な意見が出てくる。



えちご や あきら
越後屋 朗
大学神学部教授

が、福島県の場合は放射線の風評被害という問題を抱えています。例えば会津地方の観光は大打撃を被っている。放射線の報道が続く限り、会津の観光は立ち直れないでしょう。東北全体、東日本一帯が危ないところだという報道が続くと「営業妨害だ」という電話が、実はかかってくる。福島県の人々が東京のタクシーに乗車拒否されたり、結婚式がだめになったり、福島県では出生率が25パーセントも減ったり。県内での出産をためらう人が多かったということです。正確な情報がないから仕方ない部分もありますが、内でも外でも風評被害がある。

例えば茨城県東海村の臨界事故の時は、東海村名産の干し芋が深刻な風評被害を被りました。でも報道されなくなったら私自身気にしないで食べているという、日本人のたくましさみたいなものがありますよね。ですから私自身、どちらが正しいとは言いつけない部分がありますが、報道しないことがもしかすると幸せにつながるのかもしれないというジレンマに今、陥っているところもあります。

影山●おっしゃる通りですね。

放射線問題については専門家の間でもいろんな意見がある。我々は情報の取捨選択が非常に難しくなりました。これらの情報の山を整理してくれる人も必要になってくるのではないかと思います。関西でも簡単に情報は入手できますが、その情報の信憑性、信頼性の判断について、何かアドバイスがあればお願いします。

影山●メディア人の中でも二極に分かれています。パーソナルメディアとマスメディアの間にある、いわゆるSNS的なメディアに対しては懐疑的なメディア人も多い。「あれはメディアじゃない」と言い切る人もいます。一方で、これこそこれから社会に大切なんだと、ポジティブに評価するメディア人もいます。私としては、一緒に新しい社会を歩んでいく上でそれらがうまく競合し、互いの立場を尊重しながら生き残り、大きくなっていくことが必要だと思います。

ツイッターなどで整理しきれない情報をマスメディアが整理することはできると思います。一つずつは良い情報であっても、パソコンや携帯の画面からすぐに消えていくと、もう拾えない情報もある。

それについて特に新聞などの紙媒体が、特に被災地では非常に大きな役割を示した。今回それが証明されたわけです。



越後屋 ●マスメディア同士が協力態勢を取ることは可能でしょうか。
影山 ●マスメディアはセクシヨナリズムが非常に強い。東京や関西から被災地へ行く新聞社が5社、10社となると、そのために現地で渋滞が起きたりガソリンが不足したりする。挙げ句に「メディアを優先しろ」などということが、実は起こっています。しかしその中でメディア同士の協力態勢をつくっていれば、取材するジャンルや土地を分担することは可能だと思えますね。でも「我がメディアが良い報道を、特ダネを」という競争意識が先に出てしまう。馬場さんがおっしゃった、雨の中で放射能を心配しながら新聞を届けるという価値観に、メディア人としてはもうちょっと喜びをかみしめてほしいと思いますね。

馬場 ●どの専門家の意見を信じればいいのかという問題は、福島県でも意見が分かれています。これはお話ししていいかどうか分かりませんが、医学系の先生方、広島・長崎の被ばく者の治療をしてこられた先生方は、癌のリスクにおいて福島の被ばく量は受動喫煙や野菜不足と同程

度であると公言し、批判的になっていきます。これは困ったことですが、福島の被ばく量を「危ない」と言う学者は注目されて、世間も「その通りだ」と言う。でも「大丈夫だ」という人は非難されてしまう。それはSNSなどが発達した現在だからその現象でしょう。マスメディアならそういう論陣は張らないでしょうが、個々人が情報発信できる今だからこそ、「危ない」というセンセーショナルな市民が加担したがる傾向はあると思います。

越後屋 ●最初の段階でもデマが飛ぶなど、悪い方の情報に引っ張られる傾向がありましたね。そこは影山先生のおっしゃったように想像力をもつて、我々みんなが今後の日本社会を切り開いていかなければいけないと思います。

メンセンディーク ●馬場さんがおっしゃった、メディアに取り上げない方が幸せにつながるということには共感する一方で、逆に、全国的に原発事故の深刻さを感じ続けないといけないと思います。大人なら風評被害に負けず、福島の桃を食べるなどの支援もできますが、政府の

言う「安全」が本当なのかという問題意識を、まず私たちは持つべきでしょう。例えば福島県の場合、ベラルーシと比べて避難区域が非常に狭い。それが本当に安全なのかという危機意識を持たないと、また「原発ありき」の時代が続くことになる。そう思うと、メディアがもっと福島以外のところでも現実を明らかにして整理してほしいし、日本の専門家もチェルノブイリを研究してほしい。長崎・広島の被爆者の治療に当たったドクターもおられますから。

未来の地球のために 放射線被害の検証と 正確な報道を

越後屋 ●原発や放射線被害について、もつと一人ひとりが学ばないといけないということですね。

メンセンディーク ●広島と長崎を経験している日本がなぜ原発を選んだのかという歴史を知ることが大切です。アメリカは、当時明らかにしていた原発被害の実態を隠そうとしました。市民は現実を

よく知らないまま「原子力の平和的利用だ」と言われ、日本は原発推進路線に乗ってしまった。そして皮肉にも、原発を唯一経験している国が原発被害に遭ったそれを繰り返してはなりません。日本だけではなく、これは人類全体、世界にとって大切なことです。

そういう意味では、もちろん福島ができるだけ元の暮らしに一日も早く戻ってほしいけれども、やはり現実を伝え続ける責任がマスコミにはあると思います。そこに凄く複雑な思い、葛藤があります。

馬場 ●おっしゃる通りです。実は弊社の記者がベラルーシ・ウクライナ福島調査団に参加してチェルノブイリへ行きました。彼の報告を聞くと、現在チェルノブイリの周りは荒野。11万6000人を強制移住させたので誰も住んでいない。しかし福島は人が住んでいる所で低線量被ばくがじわじわ起こる、世界で初めてのケースです。こういう言い方は不適切かもしれませんが、すると我々福島県民はモルモットみたいな存在になっている。世界中の学者は福島を非常に注目しているでしょう。だからこそ真実を伝えてい

かないと、原発事故がもう一度別の場所で起きた時の警鐘になりません。

越後屋 ●一方で、福島で暮らす方たちをどう報道していけますか。

馬場 ●それも我々の、非常に大きな務めです。その人たちがそれでも福島で生きていることを「福島で生きる」「福島を生きる」と私たちは表現しています。まさにそれが、今の私たちの報道姿勢です。どちらが良い悪いではなく、細かい事でも真実を伝えていく必要がある。国民も国の発表で判断するのではなく、個々人が正確な情報を持つて判断し、行動しなければいけないということが、いま福島で起きています。ですから原発はもう懲り懲りだと考える方はそう行動すると思いますし、それよりも福島に住み続けることが大事だと考える人は住み続けるでしょう。それは両方ありだと思えますね。その両方を我々は伝え続けていかなければならない。

鎌田 ●福島にいる友人は、馬場さんがおっしゃったように、個々人が今後の行動を決めていくしかないんだと言っていました。風評被害は絶対に許せませんが、

では何が真実なのかを見極めるのは大変難しい。安全基準が変われば今まで安全だったものが危険な状況に変わる事がある。様々な意見や見解を聞いていく中で、やはり最後は自分で決めるしかないんだと思います。

同志社でも継続した支援と 震災教育を

越後屋 ●教育においても、こうしてたくさんさんの情報を集め、場合によっては比較し、どれが最も価値のあることかを見極め、それに従って行動していける人間の育成がこれから必要とされることを、今回の大震災で私もつくづく実感しました。被災地にも、これからもっと長期的支援が必要になりますから。小誌の読者に向けて、今後被災地とどう関わっていけばいいか、あるいは学生を巻き込んだプロジェクトのお話などがありましたら、ぜひお願いします。

鎌田 ●同志社中高では地震、津波、原発に関する授業をしたり、それをテーマにした自由研究などにも取り組んでいます。

越後屋 ●メンセンディック先生に、そのあたりは中心になってやっていただきたいですね。実際、個々にフットワーク軽く行動している学生が結構いますが、それを周りの教員はあまりよく知らない。それはそれでまた同志社で良い部分なのかもしれないが。ただ学校としても学生たちの活動基盤の整備は必要でしょうね。

鎌田 ●結局大事なのは「人と人とのつながり」です。いろんな所とつながりを持つことで、点と点の活動がつながって線になり、面、立体になり、やがて大きな塊に集約される。これをまず同志社全体で実現させたいですね。その塊が被災地の方々と結び合う。いろんなつながりがあるからこそ、そこに強い思いが生まれ、いざという時に本当にありがたい友情が培われていくのだと思います。

メンセンディック ●被災地での活動から戻った学生が報告する場も必要です。ある学生は自分の活動をゼミで報告したいと言ったところ、ゼミの先生に断られたそうです。「自分が被災地に行ったからといって全部が分かったように思うのは

高校の社会の先生は夏休みに仙台から陸前高田、福島などを回って写真を撮り、それを授業で紹介したり、現地でボランティアをしている方を礼拝に招き話をし、て頂いたり、様々な取り組みをしています。今年3月11日には、副校長、生徒部主任、新旧生徒会長と私とで宮古第二中学校を訪問し義援金を寄付する予定です。宮古は新島襄が出国した函館に赴く途中、青森県の風間浦へ行く前に寄港した土地です。被災した学校を生徒が直接訪問する事で、生徒同士の交流が始まり、今後に向けての継続的な支援につながっていく事と思います。

メンセンディック ●私は世界の居住問題を考えるサークルの顧問をしています。そのメンバーの女子学生が、一つの企画を持ってきた。震災からの復興につなげる方法の一つとして、来年のNHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公、新島八重さんの故郷である会津のグッズを同志社生協で売りたいと言う。彼女は東北、特に福島に仕事をもたらず活動をしていた大阪のNPOでインターンシップを行っていた、かなり問題意識の高い学生です。生

間違いだ」と、かなり厳しく言われたらしい。逆に、学生を通して被災地の声を聞くとというオープンさが、大学の姿勢としてぜひ必要だと感じます。

影山 ●今日はこのように素晴らしい場をいただき、私も何かアクションをしようと思いました。同志社でも、教育の場であるからこそあまり大上段に構えず、じわっと学生たちの心にしみ入る形での手助けを、教員の一人としてできると思うんですね。大々的に講座を設けるのももちろん大事ですが、授業に何気なく震災の話を入れるのも教育として大事だと思います。学生は意外と教員の雑談を覚えているものですし、それで不十分な部分は、東北や被災地の方が話してくださる場を大学が提供するなどの環境づくりを行いたいですね。

なぜこういうことを言うかというところ、教えるの間では阪神淡路大震災がそろそろ「歴史化」しています。もう1、2年で、その時はまだ生まれていない人たちが入学してくる。まさに、想像力がないとどうにもできない時期がやってくる。**越後屋** ●その時、私たち教員にできるこ

協に企画を持ちかけたかどうかは分かりませんが、そのような取り組みも興味深いですね。

同志社大学では学校単位でボランティアセンターを設置したり、バスを仕立てて被災地へボランティアをしにいったりという活動はしていますが、学生たちで組織して動いていませんが、数多くあります。ただ問題は、個々の活動同士がつながっていないこと。10月にキリスト教文化センター主催でボランティアに行った学生たちが自分たちの経験を分かち合う集いがありましたが、これは非常に有効でした。学生のいろんなアイデアを実現するためのセンター的な役割が同志社にも必要ではないでしょうか。

私自身も教員の一人として、学生からボランティアの相談を受けたり、仙台の受け入れ先を学生に紹介したり、原発問題について授業で取り上げたりということを、今後も継続していきます。大学としても、ゲストスピーカーの招へいや公開講演会の開催などではできると思います。ワークショップ的に学生たちが質問や議論をする場も、もっとあっていいですね。

とは何でしょうか。

影山 ●彼らの想像力を手助けしてやることです。先ほどラジオの話をしましたが、ある学生が「ラジオを聴くのはしんどい」と言う。目に見えないものを想像するのはしんどい。ラジオの魅力は想像するところにあるのね。今の学生には、目に見えないもの、手にしたことがないものが、飛躍的に興味対象でなくなっている。しかし見えなくても、世の中には凄く大きなものがあることを知らせてやりたい、その手助けをしたい。東日本大震災についても私はそう思っています。**越後屋** ●馬場さんから同志社の皆さんに対して、かけたい言葉、期待していることがあればお願いします。

馬場 ●私自身も会津の出身で、こういう座談会にお招きいただいたのも何かの縁だと思います。来年の大河ドラマは会津にとっても非常に大きな出来事になるでしょうし、同志社にとっても大きなニュースでしょう。新島八重だけでなく、山本覚馬がどういう人物でどんな生き方をしている、なぜ同志社を設立する新島襄に力を貸したのか。かつて戊辰戦争で会津藩は

国を奪われ、斗南藩まで国替えさせられて辛い思いをしました。その中で八重と覚馬がどのように京都という新天地で生活を始めたのかを、もう一度同志社の皆さんに知っていただきたい。ぜひ会津に来てください。それが福島にとって一番復興につながります。

越後屋 ●福島民報社としても、観光復興について何かしておられますか。

馬場 ●中高生向けに会津の魅力を知ってもらうイベントを、この夏以降に会津で開きたいと考えています。大河ドラマブームとして全国の子どもたちも会津に来てくれると思うので、合わせてその場で同志社を知ってもらう取り組みも今後し

ていきたいですね。

紅白歌合戦にも出場された「猪苗代湖ズ」のサンボマスター・山口隆くんは会津出身です。昨年9月には彼にも出演してもらって「LIVE福島 風とロックSUPER野馬追」というイベントを弊社で開催しました。正月には新島八重役の綾瀬はるかに登場いただき、会津の郷土玩具「赤べこ」と共に同志社をPRしました。福島から元気を発信し、それを京都や全国の卒業生に知っていただくことが、私にできる一歩かと思っています。弊社でも同志社のPRは今後もしていきます。宜しく願っています。

メンセンディーク ●同志社時報を読まれ

る方はぜひ東北に足を運び、東北の美しさを実感していただきたいですね。

越後屋 ●今日は教えていただくことが非常に多くありました。馬場さんも遠くから本当にありがとうございます。東日本復興はかなりのスパンになります。同志社と会津との関わりもありますが、福島をはじめとして被災地の状況を継続的に注視していき、学生たちにきちんと理解してもらうような教育を同志社でも積極的にすべきだと感じました。本日は皆さん、貴重なお話をありがとうございました。

(2012年2月13日今出川キャンパス 博遠館会議室)

「だけど、くじけない 子どもたちからの元気便」

長倉洋海と東北の子どもたち著／NHK出版

子どもたちのまっすぐに綴られた言葉と、生きる力をとらえた写真。その二つが織りなすことで見えてくる「新たな出発」

世界中の子どもたちや紛争地域の人々の写真を撮り続けている本学卒業生の写真家・長倉洋海さんが、2011年9月から12月にかけて、東日本大震災で被災した東北の子どもたちの表情を撮りためた作品集を出版されました。生きる力と未来への希望にあふれています。

東日本大震災で被災した東北地方の子どもたちを2011年9月から撮影してきました。少しきこちなくても精一杯の微笑みを浮かべると、子どもたちはとびつきの笑顔を見せてくれます。その笑顔の奥に見える子どもたちの悲しみや切なさに触れながら、それを乗り越えるような明るさやたくましさを感じたいと、4ヶ月にわたる撮影を続けてきました。今でも私の心に残っているのは子どもたちの弾けるような笑顔と伸びやかな笑い声です。それを消さないようにしなければならぬ……。笑顔に何より励まされ、生きる力をもらっているのは私たちなのですから。

作者の言葉「だけど、くじけない」から



長倉 洋海 (フォトジャーナリスト)

1977年法学部卒業

1952年北海道釧路市生まれ。大学生時代は探検部に所属し、手製イカダによる日本海漂流やアフガン遊牧民接触などの探検行をする。通信社勤務を経て、1980年よりフリーの写真家となる。以降、世界の紛争地を精力的に取材。中でもアフガニスタン抵抗運動の指導者マスードやエル・サルバドルの難民キャンプの少女ヘススなどを長いスパンで取材し続ける。戦争の表層ではなく、そこに生きる人間そのものを捉えようとするカメラ・アイは写真集『マスード 愛しの大地アフガン』『獅子よ眠れ―アフガン1980・2002』『サルバドル 救世主の国』『ヘススとフランシスコ エル・サルバドル内戦を生き抜いて』などに結実した。2006年にはフランス・ペルピニャンの国際フォト・ジャーナリズム祭に日本人初の写真家として招かれ「マスード敗れざる魂」展を開催し、大きな反響を呼んだ。

2004年に出演した「課外授業・ようこそ先輩」世界に広がれ「笑顔の力」(NHK製作)が翌2005年、カナダ・バンフの国際テレビ祭でファミリー青少年部門の最優秀賞「ロッキーマン」を受賞した。2010年からは、地球温暖化の影響を最も受ける北と南の地を取材、写真集「北の島グリーンランド」「南の島カピガンマランギ」(偕成社)を出版している。